

教 仁 名 聞

第60号
 (発行日)
 2015年9月1日
 発行所：真宗大谷派念佛寺
 〒6638113 西宮市
 甲子園口2丁目7-20
 電話・FAX (0798)
63-4488
 (発行人) 土井紀明
 mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
 http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
 ○〈同朋の会〉
 毎月22日 午後2時始。
 ○〈念仏座談会〉
 毎月2日と12日 午後3時始
 ○〈聖典学習会〉
 毎月6日 午後7時始。
 ○〈真宗入門講座〉
 毎月18日 午後6時30分始。
 * 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

安樂無量の大菩薩

(和讃法話)

安樂無量の大菩薩

一生補処にいたるなり

普賢の徳に帰してこそ

穢国にかならず化するなれ

(浄土和讃)

(宗祖の左訓) われら衆生、極樂にまいりなば、大慈大悲を起こして、十方に至りて衆生を利益するなり。仏の至極の慈悲を普賢と申すなり。

(現代語訳) 弥陀の浄土に往生した数限りない方々は、一生補処と名づけられる菩薩の最高位に至るのである。このお方は仏のさとりをきわめていながら、しかも菩薩の姿を捨てずに衆生済度される普賢菩薩と同じように、迷いの世界に還って、いろいろ相手に応じた姿を示して、衆生を導かれるのである。

* * *
 さてこのご和讃の大まかな内容は、浄土に生まれたお方は、さまざまな姿をとって衆生の苦しみに寄り添わんがために、あえて仏にならず、仏の位より一段下の大菩薩(一

生補処の菩薩)となり、そして苦しみの世界に還り来て、あらゆる衆生を教化して仏にならしめようと、普賢菩薩のような大慈大悲の働きをかならずしたもう、といわれるのです。

阿弥陀仏は、浄土に生まれ た者にこうした衆生救済の大 悲の活動をなさしめたいと誓 われました。そしていただい て称える南無阿弥陀仏にはこ のような大悲の菩薩ならし めて下さる功德がこもってい るとの仰せです。

よく「真宗の救いとは何で すか」と質問を受けます。な るほど、宗教と言えば神仏に 救われるという話になります が、その場合、神とか仏とは 何か、という問いと同時に、「救 われるとはどういうことすか」という問いがあります。

救いとは、心が安らかになることとか、本当の生き甲斐が見つかるとか、神仏に愛さ れていることに気づくとか、 自分の本当の姿に目覚めると

か、自分のより処 なり人生の支えが はつきりすること とか、さまざまに 言われています。

真宗の救いに関 してもいろいろいわれますが、 端的に云つて「救いとは何か」といいますと、量りなきいのちと智慧と慈悲なる阿弥陀仏のお働きに摂め取られて離れない身にならしめられることです、と言えましよう。それを「摂取不捨の利益」と申します。これがこの世の救いでもあります。

そして、この世で摂取不捨の利益をいただいた人は必ず浄土に生まれ仏にならしめられるのであります。摂取不捨の恵みをいただいた人は、オートマチックに、この世を終えると仏になる、とお聞きしています。

さて、阿弥陀仏に摂取された人は、「自分の問題はすでに阿弥陀仏が決定的に解決して下さった。ああ有難い」ということになりませんが、そこでおお大きな問題が残るのです。それは、自分は救われた、では他者の救いはどうなるのか、という問題です。他者が不幸なまま、救われないまま

で、自分だけが救われて、それでよいといえるのであろうか。

本当に自分の願いは実現して、何も云うことはなくなつたのか、というところはありません。自他が共に救われることがなければ、私のいのちの底にある「共に救われた」という真実なる願いは満たされないので。共に救われていく、その道にださせていただくことによって、自我的心を超えたいのち、いのちそのものの願いが満たされるのであります。

では救われた私はこの世で他者を救うことができるか、という次の問題があります。私は救われたから他者を救いたいと願って、自由に他者を救えるのであろうか。こういう問題に直ぐにぶつかります。

しかし、他者どころか、自分自身を毛ほども救うことはできないのです。もうまるまる南無阿弥陀仏様に助けていただく外に私自身の救いはありません。そういう私が、いくらこの世で阿弥陀仏にであって救われたからといって、他者自分分の力で救うことができるかという、他者を救うことは

まったく「力及ばない」ことです。

かといって他者の救いはもうあきらめたという訳にはいかない。ここに人間の、最後の悲しみがあります。

なんとかして隣人なり身近な人だけでも救いたいと思っても、業の深い、煩惱だらけの愚かな私にはとてもなし得ない、そういう嘆きがありません。

なるほど他者の苦しみに対してなにがしかの援助やサポートはある程度できるでしょう。だから、縁があればそういう援助はできるだけ行いたいですね。しかし他者を本当の意味で「救う」などということとはとてもできやしない。

こうして「利他の問題」、それが残るのです。

ところがなんとまあ、この問題はすでに阿弥陀仏がちゃんと道をつけて下さっていたのですね。阿弥陀仏の本願のなかの第二十二願に「浄土に生まれた衆生は還相の菩薩となつて、普賢菩薩のような徳を身につけて、迷える世界に還り、衆生救済の働きを無窮に行かせたい」とあります。この二十二願が成就して、他の衆生を救う活動を無窮に行

いえる、そういう徳が南無阿弥陀仏にすでにこめられているのでした。

そこでこのご和讃には、このような他者への救済活動、いわゆる「還相利他」の働きが讃えられているのです。

それゆえ、南無阿弥陀仏をいただくと、自分も他者も共に救われていく徳をいただくということであり、私たちの一切の志願（真実の願い）が満たされていくのであります。

この利他の問題は非常に大事であつて、それについて先年、幡谷明先生（大谷大学名誉教授）のお話にも、この問題にふれられ、その中で、キリスト教徒（カトリック）であつた聖女マルタンのお話が紹介され、感銘を受けました。

聖女テレーズ・マルタンは（一八七五年〜一八九七年）はフランスの片田舎で九人姉妹の末子として生まれました。その家庭は、神にたいする敬虔感情で満ちていました。この一家では、地上での人生の目的は謙遜と愛と善意を養い、浄らから聖なる信仰生活を送ることでした。（こういう家庭生活をしてきた人たちがいたのですね。）マルタンは四才で

実母を亡くしました。このころから彼女は、自分の天職は神への奉仕であると感じ始めたらし、すでに修道女になつていた姉にならつて九才の頃、自分も修道女になろうと志願しましたが、年齢が若すぎて許されなかつたのです。

一五才の時にようやく望みがかなえられて修道女になり、僧院での生活に入りました。僧院にあつて彼女は清貧、貞潔、服従の徳の実践に熱心に努め、隣人への愛の行いにはげみました。彼女の祈りの心境の深まりは顕著でした。ところが、マルタンは肺炎にかかり二十四才で天国に運び去られたのでした。死期の近づいたことを知つたマルタンは、生前「天国に生まれた後、再びこの世に立ち還り、この世において宣教のはたらきに一身をささげたい」と周りの人たちに語りました。そしてこう云つています。「私は死後、天国からバラの花の雨（恩恵）を降らします。私の心をひくものは天国の幸福ではない。それは愛であり、愛し愛されること、そしてその愛を人々にもたらせるために、この世界に還り来ることです。」

と言つています。かたわらにいた修道女が彼女に

「あなたは天国から私達を見おろしていただけることでしよう」とい

えば、マルタンは「いや、私は天国からこの世界に降りてまいりましょう」と預言的に答えました。

このような天国における永住よりも、地上に還つて来て、人々の苦しみに寄り添い、人々の幸せのために身をささげたいというマルタンの預言的な志願は、当時のキリスト教会に異常な反響を呼び起こしたといわれています。

キリスト教では、死後天国へ昇天し、キリストのもとにいつた人は、もうこの世に還つてくるなどということは説かれていません。ですから、マルタンのこの言葉は従来のキリスト教の通念を破つた言葉として注目されたのでしよう。

しかし、このマルタンの願いは、おそらく私たちの自我心を超えて、いのちそのものがもっている極めて純粹でしかも消すことのできない、真実の普遍的な願いだと思ひます。マルタンの特殊な願ひではなくて、衆生のいのちそのものに眠っている普遍的な願ひであつて、この願ひにうな

がされたのがマルタンでしよう。それは私たちの根源的な願ひであります。

自分一人の幸せではなく、すべての人と共に幸せでありたいし、人々の苦しみとともにあり、人々の苦しみを除きたい、そのために働き続けたいという願ひであります。

この心は仏の心の本質です。し、衆生をして仏の心に生きる菩薩にならしめて、穢国である苦しみの世に還らしめ、救いの働きを限りなくさしめていこうというのが、阿弥陀仏の第二十二願です。

二十二願はかりそめにおこされた願ひではなくて、仏の智慧と慈悲から起こされるべくして起こされた阿弥陀仏の願ひでしよう。（了）

〈遠方法話予定〉

- ①九月十日（十時〜二時半）。名古屋別院。座談有。
- ②九月二十五日。午後二時始。笠松別院（岐阜県羽島郡笠松町）
- ③十月十日（十時〜二時半）。福井別院。座談有。
- ④十月二十一日（十時〜二時半）。坪井宅（名古屋市内）。座談有。
- ⑤十月二十八日（午後）〜三十日（午後三時半迄）。福井別院。座談有。

真宗信心の問

のまま称えるばかりで浄土に生まれさせる。

(ときどき質問が当方へ寄せられます。その事例を一つ取り上げ、それに対しての応答をここに述べさせていただきます)

(問)

阿弥陀仏のお心は「そのま
まなりで助ける、心配するな」
といわれます。すごい事だと思
います。その半面、そのよ
うな働きが「本当にあるのだ
ろうか？」という気持ちも起
きてきます。

また仏様が「助ける」との
仰せですが、「どう助けて下さ
るのですか？」

(お答え)

率直に疑問を述べられ有難
うございます。この疑問に対
し、限られたスペースでお答
えすることは難しいので、簡
単に申し上げたいと思います。

まず「そのままなりで助け
る」という阿弥陀仏の仰せは、
第十八願の思し召しです。こ
とに「乃至十念 若不生者

不取正覚」という阿弥陀仏の
大悲の約束です。これは「そ

そのほかに何もいらぬ」と
いう驚くべき救済の言葉です。
阿弥陀仏のこの大悲の誓い
を、誰が私たちに説かれたの
か。それは釈迦如来様です。

釈迦仏は無上の悟りを成就
され、その覚りの智見におい
て阿弥陀仏の働き(本願他力)
を感じて、それを説いて下
さったのが『仏説無量寿経』
です。ですから、このお経の
中にある「乃至十念 若不生

者 不取正覚」の阿弥陀仏の
第十八願の言葉は仏語(釈迦
仏)なのです。凡夫の勝手な
おしゃべりではありません。
そして「仏語は本当だった」
と、この仏語を受け入れた無
数の方々が歴史上に現れまし
た。代表的なお方が善導大師
や法然聖人や親鸞聖人など
です。この方たちはこの仏語を
信受して、量りない真実に触
れ、心が開かれました。そし
て「阿弥陀仏の誓いはまこと
であった」と喜ばれ、あかし
をされたのです。

この阿弥陀仏の第十八願を、
自分の思案や考えをさしおい
て、仰せのままに受け入れた

時、不思議にも阿弥陀仏の撰
取の働きに掴まれてしまい、
そこに大いなる安らぎを経験
されたのです。そして私たち
に、「汝の考えはどこまでいっ
てもラチは明かぬ、弥陀の本
願まことにてまします。どう
かこの本願の言葉を受け入れ
て助かってくれよ」と、お勧
め下さるのです。

迷いにどっぷりとつかって
いる私たちが、「そのままなり
で助ける」という阿弥陀仏の
救いに対して、それが本当か
どうかをどれほど確かめよう
としても、とても確かめられ
るものではありません。凡夫は、
身の回り三寸のことさえはっ
きりと分からない愚かな者で
す。ですからそういう凡夫の
考えや判断で、弥陀の本願に
対すると、本願を疑うのは当
然です。

ですから、凡夫の判断で、
弥陀の本願は真実であると「確
かめてから本願を信じよう」
とするならば、いつまでたっ
ても本願は受け入れられませ
ん。

じつは本願は、信じた後に、
信じた人において「弥陀の本
願はまことである」と了解で
きるのです。ですから善知識
方は「弥陀の本願はまことだ
から、あれこれ計らわずに、

不思議なお助けよと受け入れ
てくれよ」とお勧め下さるの
です。それにしたがって、信
受してみれば、本願のお助け
は今この私において現実化
するのです。

また疑う心はドレホド起こ
つても、「真実は真実であつて
ちりばかりもゆらぎません」。
唐辛子は、辛いと思つても辛
くないと思つても、凡夫の思
いに一切関係なく、「唐辛子は
辛い」のです。本願を凡夫が
どれほど「本当かどうか」疑
つても、凡夫の思いに関係な
く、本願はまことなのです。

それゆえ自分の考えではい
つまでたつても決着はできな
いと自分の考えを見限つて、
「弥陀の本願はまこと」と仰
いでいただきたいものです。

また「どのように助けて下
さるのですか」とのお尋ねで
すが、一言でいえば「南無阿
弥陀仏とたのませて助けて下
さるのです」。口に現れて下さ
る念仏の声は、「そのままなり
で引き受ける、我にまかせよ」
の阿弥陀仏の仰せです。

「南無はたのめ、阿弥陀仏
はそのまま引き受ける」のい
われが南無阿弥陀仏の六字の
意味です。

この南無阿弥陀仏の仰せに

信順する、いわばおまかせす
る時、はからずも阿弥陀仏の
撰取して捨てないという大悲
にであい、阿弥陀仏と離れな
い身にならしめられるのです。
ですから「どのように助け
て下さるのか」というと、「阿
弥陀仏をたのませて、阿弥陀
仏と離れぬ身にして下さる」
ことによつてです。

ただ、「我をタノメ」と仰せ
下さる阿弥陀仏の仰せにおま
かせすることは、傲慢な私た
ちにとつて極めて難しいこと
です。私の側からは不可能な
ことといつていいでしょう。

けれども、「助からぬ者をタ
スケル」との大悲を聞いてい
くと、私たちが死の闇に囲ま
れ、煩惱をどうすることもで
きず、しかも無知無能の、ま
ことに救い無き状態にいるこ
とが照らし出されて、「タノメ、
マカセヨ」の仰せがいかにも
有難いと受け取らずにはおれ
なくなるのです。

ですから阿弥陀仏をたのめ
ぬ私に、たのまずにおれぬ私
の姿を知らせて下さつて阿弥
陀仏をたのませて下さるので
す。すべては阿弥陀仏の大悲
のお力によつてです。

(完)

木村無相さんの法信

36

(昭和五十八年十一月七日のお便り。ご往生される二ヶ月前です。無相さん八十才)

(前号からの続きです)

* * * * *

ワレワレ凡夫がドレダケ疑っても、邪魔にはならず、どれだけ信じてもお助けの足しにはなりません。

「凡夫の心」はすべて

ソラゴト、タワゴトマコトあることなしですから。

信心、安心の上にはぜんぜん用がないのです。

ただ念仏のみぞマコトにておわしますです。

○

ナムアミダブツ ナムアミダブツ

ナムアミダブツ ナムアミダブツ

○

さて紀さんのこと、どこまでいっても、ハカライのやまぬ紀さんに

「末灯鈔」のお言葉、

「ご消息」のお言葉が大鉄槌てつゑいになったという。その結果、今、どうですか、そのことが、私には、ゼンゼンわかりません。それについての返事の書きようがないワケです。

それで、「末灯鈔」の中で、

凡夫のハカライなく、

弥陀にマカセヨ

との聖人のお手紙はもう十数年前から、気がついていましたが、ソレは私には不可解

でした。

落第でした。

○

「明治

書院」の

「聖典」

総ページ数、521ページ、第七通に

「往生は何事も何事も、凡夫のハカライ

ならず、如来の御誓にまかせまいらせられ

ばこそ他力にては候え。」

○

523ページ、第九通に

「往生の業には、私のハカライはあるま

じく候うなり。あなかしこあなかしこ。た

だ如来にまかせおわしますべく候」

○

同じく523ページ、第十通に、

「ただ如来の誓願にまかせまいらせ給うべ

く候。とかくの御はからいはあるべからず

候なり」

○

529ページ、第十九通に

「往生はともかくも、凡夫のハカライに

てすべきことに候わず、めでたき智者

もハカラウべきことに候わず、大小の

聖人だにも、ともかくもハカラワデただ願

力にまかせてこそ、おわしますべきこと

に候へ」

とあるのに、

私は何十年となく、

私のハカライをやめて、

如来にマカセようと、かかりましたが、

私の心のハカライはやまず、

如来に我が生死分離は、マルマカセ出来な

いのであります。

○

かくして「信ずること」も、

「タノムこと」も、

「ハカライなく、ミダにマカセルコト」も

一切、私には不可能なこと、一切落第な

でした。

○

ところが

ただ念佛せよ

「よき人の仰せ」

「如来の勅命」の

まんまに、

ただ念佛し、

ただ念佛申すだけの

身にならせていただく、「よき人の仰せ」、

「如来の勅命」の

まんまに、

ただ念佛申す

そのことが、

オノズカラ

本願を信じ

タノミ

ハカライなく

ミダにまかせる

ということに なっているのです。

驚きました。

○

「よき人の仰せ」

「如来の勅命」の

まんまに、

ただ念佛申すことのホカに、

「本願をタノム」とか

「如来を信ずる」とか

「ハカライなく弥陀にマカセル」

ということはないのであります。

○

「よき人の仰せ」

「如来の勅命」の

まんま、

ただ念佛申すだけ

で、充分なものでした。ホカになんにもいらないのでした。

○

またつかれて、ウトウトと、ねてしまっ

ていました。今(ゴゴ二時半)目ざめて、

お念佛さまに、

書けよ々々々

とはげまされて、また、書きます。

○

さて、紀さん、ここで、面倒だけれど明

治書院の「聖典」

『尊号真像銘文』

の476ページ、のおわり近い

光明寺善導和尚の銘に曰く

のトコロを開いて下さい。

そこには

即嘆仏というは、

すなわち南無阿弥陀仏と称うるは、

ほめたてまつる語になるとなり

また、「即懺悔」というは、

南無阿弥陀仏と称うるはすなわち無始よ

りこのかたの罪業を懺悔するになるとなり

「即発願廻向」というは南無阿弥陀仏を称

うるは、すなわち、

安楽浄土に往生せんと願うになるとなり

(以下略)

とありますが、これと同じく、

「よき人の仰せ」のままに、

「如来のお勅命」のまんまに、

お念佛申す、

南無阿弥陀仏と称することは、

「ミダを信ずることになるなり」であり、

ミダをタノムことになるなりであり、

ハカライなく、ミダにまかせることにな

るなり

なのであります。

(続く)